
誰よりも君に・・・

黒乃 桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰よりも君に・・・

【Zコード】

Z4989D

【作者名】

黒乃 桜

【あらすじ】

クラスでも割と人気の有る方の氷月彼方に何時しか恋心という感情を抱き始めた苛められつ子の主人公、空野月歌。しかし月歌はそんな感情を抱いている自分が嫌で彼方を避けていた。一方で、月歌に対する苛めがエスカレートしていく。いろんな想いがぶつかりあつて月歌達が過去の悲しみを振り解き前に向かって歩いていく小説です。

(前書き)

初めての方は初めて。
ハッピーホンドでは有りますが、かなり暗めとなつておつます。
ちょつと恋愛要素も含まれております。

当たり前の事だった

誰かとの会話も 誰かと笑う事も 誰かに褒められる事も

僕は 初めてだつたんだ

ふざけあう事も 寄り合はう事も 遊んだり喋ったりする事も

そして僕は信じていたんだ

何時も何時でも

僕は信じた ずっとずっと信じていた

初めて君に会つた時から 信じていた

君が・・僕を

それでも

それでも僕は誰よりも君に・・・

誰よりも君に

気付いたら田で追っていた。田の端っこには必ずと言って君が写つていた。

ドキドキして 赤くなってしまう。こんな感情認めたくない。有り得ない、辞めて欲しい、こんな自分・・大嫌い。

「空野あ～ん？一緒にお弁当たべましょ～？」

そう、何時だつて逆らえずに居る。こんな自分が嫌い。それなのに ドキドキしちゃう そんな感情を抱いている自分にはそんな資格は無いのに。 莫迦みたいに田で追つてたんだ。

「・・ええ。良いですよ。何処に行きましょ～か」

殴られるつて解つてた。罵られて蹴られてパシられて水をかけられて

解つてたのに莫迦みたいに着いていく。莫迦だから着いていく。痛いの嫌です、御免なさい。泣きながらそつやつて謝る事が言えない僕が許さないんだ。 そんな自分、僕じゃない 絶対認めない。僕はただ黙つて殴られてれば良いんだ・・。それが僕。謝る事だつて出来ない ハツキリと自分の思つてる事が言えないそんな弱い僕が 本当の僕で良いんだ。

そんな事考えてるウチにほら、もう着いちゃつたよ 人気のない体育馆の裏。

誰かに足を引っ掛けられてその場にバタリと倒れてしまつ。小石みたいなのが頬に刺さつて痛い。制服が土で汚れてしまった。

「空野さん、最近氷月君と仲良いじゃない？オトモダチのかなあ
～あたしにも紹介してほしーな～・・・駄目かな！」

遠崎由衣・・・だけ。確か隣のクラス。そんな人までわざわざ「」
寧に・・。

僕を蹴りに来てくれたんだ。跳ね飛ばされて地面に頬が掠る。
其処から血が出てしまうのか、ズキズキと痛んで仕方がない。

「あーあたしもお～紹介して欲しいなあ～・・？」

ぐいっと髪を掴まれてしまった。抜けそくなぐらいの勢いで。

嶋原香代、この苛めのボス的存在。髪の毛も茶髪に染めてピアスな
んかしちゃつて・・。

大半の子がこの香代に逆らえずについて話だ。可哀想なこと。

この一人が言つてんのは、氷月彼方の事だ。きっと。
別に仲が良いわけじゃない。・・・ただ氷月の方が話しかけてくる
んだ。

僕が頼んだ訳でも無いのに・・僕何かに話しかけてくる。

氷月は格好良くて面白くて何時も笑つて勉強は出来なさそうだけ
どスポーツは結構出来るからきっともてるんだろうけどどうし
て僕何かに話かけてくるんだ。どれくらいこうしていただろうか。チャイムが鳴つて授業中。
誰も居ない体育館の裏。 独りで蹲つて・・何をしていたんだろ
う。

泣いてた訳じゃない 怒りなんて無かつた 笑つてた訳でも無い
ただボーッと校舎と木と電線に覆いつぶされた僅かな空を見上げて

いた。

今日は曇りだった、灰色で だけどとても綺麗だと思った。

まるで誰かの 心みたいで

そう 僕の心みたい 何処までも 純粋に 汚れきっている
ざーっ 雨が降り出す 夏のハズなのに寒くて仕方が無かつた
だけど動けずに居る。 後どれくらいで 僕はこの世から居なくな
れるのだろうか

「つかちやん！？」

真っ暗な中に響き渡つたとても澄んだ声。 パタパタと走る音。
雨の音なんて聞こえなかつた。

「・・・ひ・・め・・？」

「つかちやん・・・ヒドイ・・・誰がこんな事・・・」

ペしやりとしゃがみ込むと、僕を引きずつて雨が掛からない屋根の
下に連れて行く。

クラスの中でも低い方の僕よりもっと背が低くて、ウェーブの掛か
つた肩まである黒い髪の毛で髪と同じ色の皿は大きくて、綺麗に整
つた顔。

草原日芽。唯一友達と呼べる子だ。

「怪我につぱいしてゐる・・痛こよね?わつ・・すつ」
「身体冷たい
よ・・」

「・・ひ・・め・・駄目だよ僕になんかに構つたら・・田芽まで苛められちやう・・」

小さな身体で一生懸命僕を支える田芽を軽く押し退けた。田芽の身体に手をついた。

最近、一緒に居る所を見られてしまつて田芽まで苛められるようになってきたのだ。

それが絶えられなかつた。僕が。他の人まで傷付けさせるなんて卑怯だ

そう思つたから。傷だつて何だつて受けるのは僕だけで良いんだ。

だけど田芽は僕の腕を優しく振り払つて首を振つた。

「そんな事どうでも良いよ!友達でしょ・・つきあひやんだけこんな風に何て嫌!」

その言葉に何か言い返せないかと考えていたら、田芽が別の方向を向いた。

ついつられて其方の方を見た。すると其処には白衣を着た茶髪でショートヘアの女人が立つていた。口には煙草が加えられていた。

「こんな雨の中女子一人でなーにやつてんの・・風邪引くでしょー
が

「・・・せん・・せ・・・」

なーにやつてんの、と声を掛けてくれたのが保険医だと解ると一氣

に体中から力が抜け、意識が何処かへ飛んでしまった。

其処からはどうなったのか憶えていない。

目が覚めると真っ白なカーテンがふわふわと揺れているのが目に入る。

雨も上がつて晴天。 嘘みたいに晴れ渡つた空が窓の外で続いていた。

此処が何処だか解らない。 真っ白な布団をぎゅっと握つた。かたかたと震えているのが解る。 ハワイ?

そんなのも認めないよ。 そんな感情認めないよ。

コワイって思つたら逃げるんだ。 そつだろ? だから駄目だ。

「・・・・・卑怯者・・・・」

自分の事だ。

「・・・空野。 起きたかー?」

不意に聞こえた声。 カーテンから目を離して声のした方を見た。先程の保険医、木葉 若葉だ。

ぼんやりとその若葉を見上げるだけで何も言わなかつた。

「まつたく・・倒れるまで無理すんなつてーの。 聞こえてんのー? 返事くらいしなさいな?」

煙草を加えたままへりつと笑つてみせると僕が寝ているベッドに座つて僕の頭を撫でた。

返事くらうしなさいな、と言われたがやつぱり僕は黙つて若葉を見上げていた。

「・・・もー・・・まあ良いけど。なんかあつたら言いなよ?」

呆れたような表情を作ると、僕から手を離す若葉。

その時に、日芽の事を思い出す。日芽は?日芽は何処?見渡してみるが、何処にも居ない。急に怖くなつてしまう。消えてしまつたんじやないか、つて。有り得ない事なのに。

また居なくなつちゃつたんじやないか。つて。

「・・・先生・・・日芽は・・・?」

若葉の短い茶髪を掴めば思いつきり引っ張つてそう聞いた。「痛い痛いッ!」と言いながらも、此方を振り返る。それで慌てて手を離せば黙つて若葉を見上げた。

「もーっ・・・日芽ちゃんは、今授業に出てるトコ。心配しなくても大丈夫だつて。」

頭を押さえながらも言つた若葉の言葉に少しだけ安心。だけど、大丈夫だつて、と言われてもやはり少し心配。自分の所為で日芽が苛められてさつきの僕みたいになつてしまつたらどうしよう?

そんな事を考えると、大人しく寝て何かいられなかつた。

「あーもー彼奴マジウザ。」

「・・・そ、そりだよねえ~」

何時だつて逆らえずに居た。 こんな自分ダイシキライ。

最近は、 田芽まで苛められるよつになつてきた。

最初は・・最初は空野月歌だけだと思つてた。

だけど田芽は・・月歌と仲良いから。 田芽はあたしとも友達だけど

月歌とも友達なんだ。

あたしだけのモノとは限らない。 だけど田芽が苛められるのは嫌だ。

田芽を傷つけてるのが あたし 何て認めたくない。

だけど・・此奴に・・香代に逆らえない。 憎く怖い。

「・・・こひしてやりたいよねえ~」

香代は時々こんな風に残酷に笑いながら酷い事を言ひ。

そしてそれをやりかねない。 本当にこひしてしまっこうで怖い。

「うん・・本当にねえ~」

自分もそうだ。 きつとあんな風に 残酷に笑いながら酷い事を言つてるんだ。

そしてもし、 香代がそれをやひひつて言つた時

あたしは大人しくそれをやるんだ。 そう、 今やつてきたみたいに。

「あー、 もう掃除なんてやつてられるかよーー。」

ガシャンッ 香代は持っていた箒を床に叩き付けた。
そして辺りを見回して何かを見つけると、 にっこり笑みを浮かべる。

「草原さん、 これやつとこでくれない？」

草原・・日芽。

「え・・？」

「じゃ、 よりしくねえー！ 由衣、 草原さんやつてくれるつてうち
らはかえろーー」

日芽はあたしの方を見て、 どうして、 といったような顔をした。
あたしは日芽から目を背けて香代に、 うん、 と返して香代について
歩き出した。

今 あたし 憎く嫌な奴だ

今 あたし 日芽に嫌われた 嫌な奴だつて 裏切られたつて

あたし 何やつてるんだろう

「・・・由衣ちゃん・・・私の事嫌いになつたのかな・・・」

ぱつり、箒を動かしながらも咳いた。
でも、幾ら由衣ちゃんが私の事を嫌いになつてもこんな事をするよ
うな仔じゃない。
そう・・・信じたい・・・。

「ひーめちゃん 何やつてんのー?」

不意に聞こえた声。振り返ると、氷月彼方君が居た。
人懐っこい笑顔で笑いかけてくる。

「え、あ・・あの・・掃除・・です。」

「掃除いー? 日芽ちゃん今日掃除当番じや無かつたっしょ?」

何でそんな事知つてるんだろう、そんな事を一瞬思つていると
彼方君は私の持つていた箒を取り上げた。
そして此方を見ると、やつたぜ、みたいな顔で笑いかけてくる。

「あ。あの・・えと・・?」

「日芽ちゃん一人じや大変でしょー。俺もやる?」

「え・・あ・・ありがとうござります・・・」

彼方君が掃除、何でいうイメージは全然無かつた。
制服も着崩していて、未成年なのに煙草吸つてて、何時も不良っぽ
い人達と連んでて・・そんなイメージ。

掃除なんて面倒臭いとか言いながらさつきの・・香代さん達みたいに私みたいな仔に押しつけてるってな感じ・・。
こんな言い方・・あんまりしたくは無いんだけど・・。

「・・・シ・日暮・・・・・・・・

「・・・つかひちゃん・・・・?」

自分の名前を呼ばれて、辺りを見回すと田線の先に先程保健室に運ばれた

つかひちゃんが肩で息をしながら立っていた。

慌ててつかひちゃんに近寄ればどうしたら良いか解らずにいるとつかひちゃんがするするとその場に座り込んでしまった。

自分も座り込めば泣き出しちゃうになつてしまひちゃんの背中を撫でた。

「・・・つ・・・怪我・・・無い・・・?」

「え・・?」

「何もされて無い・・?傷ついたられて無い・・?」

「な、何言つてるのー?つかひちゃんはつかひちゃんの心配だけしてれば・・良いんだからあ・・・・」

さつきの怪我で立つてられない状態なのに、私の事心配して此処まで来ててくれた。

痛い身体を引きずつて無理して此処まで来てくれた。

そんな つかひちゃん が とても 痛々しかった。

見てられなかつた。 見たくも無かつた。

どうしたらつきちゃんは自由になれますか、返つてくる事の無い答えを待ち続ける。

そんなのもう絶えられない。

「・・良かつた・・」

薄く一生懸命な笑みを浮かべた。 それはほぼ無理矢理な笑顔。痛くて痛くて苦しかつた。 私は何もしてないのに変な罪悪感に襲われる。

それこそあれだ、 生きてて御免なさい 平氣で御免なさい ギヤグなんかじやなくて本当に 泣きたくなるくらいそう思つ。

私はしんでも良いからつまむやんを自由にしてあげて

そんな事を思わせる笑顔。 どうせなら泣いていて欲しかつた。

「良くない・・良くないよ・・・つきちゃんがこんなこ・・・

「・・空・・野?」

私の声を遮つて聞こえた声。 後ろからだつた。

振り返ると先程まで掃除を手伝つてくれた彼方君が驚いたように目を丸くして此方を見ている。

今まで彼方君の存在を忘れてしまつていた。 とても酷い事だから本人には言わないけど。

「氷月・・・」

逃げたしたいような気持ちになる。

今すぐ此処から立ち去って走り出したいような気持ちになる。
可愛い言い方をして ドキドキが 止まらない。

そんな感情『無かった』ハズなのに。

同時に惨めな気持ちになつてしまつ。こんな見苦しい姿で…。

氷月はゆっくりと此方に近づいてきた。丁度僕の前で止まる
日芽は氷月を見上げる。僕は顔を大きさに背ける。
だけど氷月は・・優しく手を差し伸べた。

「立てるか？」

その手を掴みたくなかった。もし掴んでしまつたら

僕はこの人に依存してしまつ。

掴めなかつた。掴めずに氷月から顔を逸らしていた。
思いつきり不機嫌な顔、嫌な奴、そうだつたに違ひない。

・・だけど急にぐらりと身体が浮いた。

「！？」

驚き目を丸くした。言葉も何も出なかつた。

もともと此処にくるまでに体力を消費してしまつて抵抗する力も残
つていない。

・・・・それが少し、嬉しかつたと同時に残念だつた。

「氷月・・ツ降ろせツ」

「何で？」

「何でつて……良いから降ろせみッ……」

しにかけた声でそう抵抗した。力無くさつき日芽にやつたみたいに氷月の身体に手をついた。氷月は気にせずにそのまま歩き始めた。日芽は後ろから付いてくる。心配そうに此方を見ながら。僕は離せと言い続けた。　ドキドキが止まらなかつた。

またもや保健室へと連れて行かれてしまった。
二度目だ。折角抜け出してきたのに。

「モーラーの一・・！・！・！あんた良くも抜け出してくれたねえ？」
怒りに満ち溢れた顔で此方を睨んでくる保険医。
それを無愛想に睨み返せば冷たく、別に。と返しておこつか。
それを聞くと、はあと溜息をつくと氷月に僕をベッドに連れて行く
ように言った。

氷月は軽く返事を返すとそのままベッドへと歩いていった。
もう降りせ、と囁いたけど聞こてくれなかつた。

ベッドへと降ろされると、全身の力が一気に抜けてベッドに倒れ込んだ。

枕に顔を埋めると、氷月が布団を掛けてくる。つい、顔を背けてしまった。

「ありがとう…」

一応そろお礼を言つておいた。

顔を背けたま。

滅茶苦茶嫌な奴。

… だつたと思つけどこれが自分なりの精一杯だ。

氷月の表情は分からなかつた。ただ嬉しそうな声で、どういたしまして、と

「冗談っぽい言い方で返事が返つてきた。

その後は田芽が心配そうに頭を撫でてた事と保険医の軽い説教とそれだけしか覚えてない。ただ、疲れたと心の底から吐き捨てたい気分だつた。

全然楽しくない。香代何かと遊んだつて楽しくない。

例え物凄く楽しい事でも香代が居るだけでつまらなくなる。否、怖くなる。恐怖心ばかりが生まれてきて楽しさ何て消える。

それなのに、何で居るんだりつ。何で一緒に居るんだりつ。香代が強いから? うつん。私が弱いから。

「由衣ー…? あんたさつきから喋つてないけど…」

「あつーん… 大丈夫だよ。ちょっと頭痛くて」

嘘だ。全然大丈夫なんかじゃない。

笑顔を貼り付けて言つた。咄嗟に思いついた嘘。

信じじろ 信じじろ 騙されろ

同じように笑つてるんだろ? あたしだつてあんな風に。

そうだ『嫌な奴』をやっている。この役は降りられないの？

怒鳴れ　怒鳴れ　叫き散らせ

同じようにやつてるんだろ？　私だつてあんな風に。
彼奴と同じ『嫌な奴』『酷い奴』。この役はハマリ役？ぴつたり？

「正義の味方にはなれない……だつて私…弱いから…。」

帰り道。夕陽でオレンジ色に染まつた道を歩きながら1人ぼつりと呟く。

今は、何気無いオレンジ色の街並みも　夕暮れ時の公園の噴水も道を歩く人も　流行つてなさそつなボロい店だつて　何だつて綺麗に見える。

そう。あたしよりはずつと綺麗だ。遠崎由衣は汚い奴だ。

貶して欲しい。戒めて欲しい。罵つて欲しい。

こんな弱い自分を。弱い奴だと罵つて欲しい。誰でも良いから。どうか。

人通りの少ない裏路地。表通りは思いつきりお洒落な店が沢山あるのに

この裏路地はまるで人が住んでいないような家が建ち並んでいる。そして何処までも続いていそうな一本道が続く。オレンジ色の空は電線だらけ。

心は灰色。涙は黒色。私は黒色。汚い。汚い。汚い

鞄を思いつきり道路に叩き付けては、その場にしゃがみ込んで蹲つ

た。

誰か居たって気にしない。 誰も居ない。 寂しい 。

惨めな遠崎由衣。 弱いからいけないんだ。 弱いから悪いんだ。

「紫は愛情不足の色、ですよ？」

懐かしい声が聞こえた。 幻聴かと思った。

だつてこんなにも荒れて惨めなあたしなんかに声を掛けてくる、そんな奴居ないと思つたから。

きつと寂しすぎて幻聴まで聞こえるよつになつてしまつたんだ、と苦笑。

だけどガサガサと物音が聞こえてはクスクスと笑う声まで聞こえる。

「どうしたんですか？由衣が荒れてる何て久々ですよ。」

一筋の光が差し込んだ。 真つ黒な私の中に。

ああ、そうだ。 まだ居るんだ。 あたし何かをちゃんと見てくれた人。

顔を上げる。 あたしのバッグとそのバッグの中から飛び散った小物を一個ずつ拾つて鞄の中に戻して、黒いフレームの眼鏡、色素の薄い茶髪、頼りなさそつた雰囲気、意外と可愛い顔……

「よひひよ・・」

言い終わる前に涙が出て来た。
ぼろぼろと大粒の涙が頬を伝つては地面に落ちる。

まだ居たんだ、と。 しゆほど嬉しかったから。

まだ許して貰えたんだ、と。

まだ…こんなにも優しく笑つてくれる人が居たんだ、と。

どう表現して良いか分からぬ、尊敬と嬉しさと悲しみと喜びと…
色々混ざり合つた感情で涙が零れ落ちた。

「どうしたんですか…？」

そつと頬に、よつちやんの手が触れた。 優しい声色でよつちやん
が聞く。

頬の涙を拭いながら、よつちやんはあたし何かの頭を撫でた。

咄嗟に汚してしまった、と 罪悪感を感じた。
だけど、嬉しさみたいなの方が勝つていた。

「あのねッ…あのね…あのね

」

あたしは何も言わなかつた。 言えなかつた。 泣いてしまつた。
大泣き、と言うのだろう。 こんなに泣いたのは初めてだつた。
人通りの少ない裏路地で、蹲つて泣いている。 端から見れば変な人
達。

よつちやんだつて放つておけばいいのに。

ずっと隣で頭を撫でてくれた…。

葉音陽一。昔からの幼なじみ。

学校は一緒なんだけど、学年があたしの方が一個上だから最近はあんまり会ってなかつた。

だけどあたしより頭が良いし背が高い。それから眼鏡を取ると可愛い。

なのにモテないんだよねえ。

紫は愛情不足の色。多分鞄の事を言つたんだりう。

愛情不足・・そんな甘いモノだろうか。もしかして自分に對しての愛情不足？

あたしは自分がキレイ。だから厳しく言つんだ。だけど自分に甘い。

こんな自分だいっきらい。

だけど・・ねえ。どうして傍に居てくれたの？

どうして返つてこないと分かっていても話しかけてくれたの？

ねえ・・どうしてこんなに近くで・・あたしを見ててくれたの？

ねえ・・・陽一・・。

「もう大丈夫だから・・ありがとねー。」

「本當ですか？・・何かあつたら言つて下さいね。僕でよければ聞きますから。」

優しくようひやんが笑つた。あたしは頷いて、愛情不足の色の鞄を受け取り

足早に家に帰つていつた。

悔しさと嬉しさと切なさが混ざり合つた変な気持ちだつた。

素直に甘える事が出来ない自分。 嘘付いて自分に甘えてしまつ。
こんなあたし嫌いです。 大嫌いです。

こんな僕嫌いだ。 大嫌いだ。 絶対認めてやらない。
絶対信用しない。 絶対に。

優しく笑う人も優しく手を差し伸べてくれる人もみんな嘘付いてる
んだって
頭を撫でてくれる人も心配そうに見てくれる人もみんな嘘付いてる
んだって

思つてしまつんだ。 ねえ、捻くれてる？ 恩知らず？ 勝手に言つ
てろ。
だつてみんな笑顔の裏では僕の事嫌いだつて思つてるかもしれない
でしょ？

「・・・疲れた・・」

偽りのない一言。

この言葉でさえも偽つてるんじやないか、僕はそう思つてしまつ。

誰も居ない。 真つ暗な部屋。 自分の部屋。
天上も真つ黒。 僕も真つ黒。 自分の・・部屋。 たつた一つの自
分の居場所。

ベッドの上では 涙が流せる。

もう人前で泣いたりしないから、もう誰も信じないから
だから今日だけは、今だけは・・・思いつきり泣いても良いですか？

「・・・つづ」

泣いても思つてるんだ、何時か誰かが助けてくれるつて。

甘えんな

甘えんな
甘えんなツ・・・・・・・・

僕なんか誰も助けに何て来てくれないんだ。 分かってるくせに
何時まで待つてるの？ しぬまで？ もうやめちゃえよ。

それでも氷月なら、来てくれると思つていた。 自分では気付かなかつたのかな。

氷月を今一番信用してゐるつて事。

びつしへこいんなに苦しへこいんだつ。

「きやはははははばっかみたいツ・・・

何やつてんだる。

一緒に苛めて何で笑つてられるんだつ。 いんな事して何になる。
これが幸せなの？ ねえ、そうなの？ 誰がこの答えを教えてくれるの？

ねえ、誰か教えてよ・・・答えを教えてくれる人を教えてよ。

ねえ、あたし不孝な顔してる? 「世界で一番不孝です」そんな顔、してるの?

だったら謝るからさ、救つてください何て 卑怯かな。

何やつてんだろ?

傷付けられても笑われても平氣そうな顔して。 誰も巻き込みたくない。

こんなのがどうなの? 誰が幸せになるの? 僕はそれで本当に良いの?

僕はどうしたら良い? 助けを求めるの? また? ねえ、誰か教えてよ… 」 うやつて助けを求めてみようか?

御願い僕もう一人じゃ居られない、そつやつて甘えてしまつけど良いかな。

「死んじゃえればいいのに」

気付いたら、酷い事を口にしていた。

あたしがそんな酷い言葉を吐き掛けたのはあたしと同じ「人間」なのに。

しんじやつて良い人間何ていないので。もし、あたしがしねば良いつて言つたこの子がしんでも良いのならあたしだつてしんじやえれば良いんだ。

『するいよ』

知つてたハズなのにな。 人1人の重みを。判つてたハズなのにな。 命の尊さ、人がしんだ時の悲しみ、苦し

み・・

知つてたハズだったのになあ…

「やめて…・・・もうやめて…・・・」

田芽の声が聞こえる。遠くだとでも遠くで田芽が叫んでいる。
「やめて」何をやめるんだろう? 意地をはるの? 僕に言つてるの?
そんなに哀しそうな顔しないでよ もう何もしないから しんでも
良いから

ねえ 泣かないでよ 笑つててよ

何処か とても遠くで田芽が泣いてた

止められなくなつた香代達の苛めは田口田口スカレートしていつた。

生傷が絶えない月歌を見かねて若葉が担任に言つたやうだ。
担任と校長は厳しく香代達に言つて聞かせた。

香代は冷笑を浮かべ「はー。」とやけに素直に返事をした。

・・空野月歌はといふと、保健室で深い眠りについている。
精神、体力・・色々と弱っていたようだつた。

きっと、痛めつけて欲しかつたんだ。
御前の所為だ、と。罵つて欲しかつたんだ。

「田ちゃん・・お願ひだから私に出来る事があつたら言つて?」

田芽は心配そうに僕の顔を覗き込んでそう言った。

僕は頷いた。「絶対だよ」田芽は念を押した。

氷月彼方がまたいる、何処にでも居るな、と思いつつも無視していた。

この時は田芽の優しさとかそういうのに酔つていて つこ言つてしまつた。

「・・僕、ね。人を殺してしまつたんだ・・」

どんな表情だつたかな。 どんな気持ちだつたかな。
忘れちやつたよ 哀しすぎて。 可笑しすぎて・・。
きつと凄く泣きそうな顔で可笑しそうに笑つてたんだ。

田芽は?彼方は?

どんな事思つてたの? どんな顔してたの?

「つき・・ちゃん・・」

「だからね・・僕何されても誰にも言わないでいようつて決めたんだ・・。

きつと『神様』が僕に仕返しをしてるんだつて・・・

「そんな・・・」と・・・

その先は言えませんでした。 「そんなことないよ」 言えませんでした。

だつてつきむりちゃんが壊れてしまいそうだつたから。

例えそうじやなくとも、酷いつて辛いつて分かつてもつきむりちゃんはそれに従つて生きてきたんだから、それを私は壊そうとしている。どんなに正しい事でもつきむりちゃんを壊そうとしている。そんなの出来ないから。

ねえ、つきむりちゃん。私は何もしてあげられないかもしれないけど···どうが、そんなに哀しそうに笑わないで···。そんなの痛いだけだから。

今はいつてくれないけど、何時かいつてくれますか？

空野が苛められている、それは前から知つてた。

何で止めてあげられなかつたんだろう？ 分からない。
ただ、気付いたら 目で追つてたんだ。 ずっと空野の事考えてた。
自分では気付かなかつたんだけど··· 何時しかそれは『恋感情』といつモノだと気付いた。

だけじどつして、その苛めを止められなかつたんだろう？

嶋原や遠崎がやつてるつてのも知つてたハズなのに。

今度は自分も苛められる、そんなじやなくて もつといつ···

言葉では説明できない、変な気持ち。

そんなのが身体の中渦を巻いて俺を飲み込んでいく。

誰が教えてくれるつていうんだ？

地球が出来た理由 神様の正体 僕の存在

誰が言つてくれるつて？

慰め 鳴り 同情 暴言

何時か、何時かさ。 きっと誰かが教えてくれるって
きっと誰かが言ってくれるって

何時かなんか来ないじゃないか 知つてたんだろ

何時かは何時も来てくれない

「日芽・・有り難う・・でももう大丈夫だから僕に構わないで
凄く嫌な言い方だ。 だけどこいついうしか無いんだ
だって日芽まで苛められてしまつ・・。 僕は独りで良いんだ。

「・・・どうして・・?」

知つてたんだ、 じつなる事は。

「御願い・・放つておいて・・・」

分かつてたんだ、『何時か』独りになつてしまつて事。

・・それから、何があつたつけ。

気付いたらもやもやとした変な気分で家に居た。
どうやつて帰つてきたつけ・・それも思い出せない。

日芽が・・日芽が泣いてた気がする。 誰の所為? 僕の所為。

全部全部僕の所為・・・。

「口芽には・・悪い」としたなあ・・」

ぱつり、と言葉が口から零れ落ちた。 大丈夫、もう口芽とは口き
かないから。

それが本当に幸せと呼べるのかな・・僕には何も分からなによ。

苛めだつて無くなつたのに もう普通に戻つて良いんだよ

天使が甘やかす。 悪魔に見える。

優しく手を差し伸べてくれる そんな事しないで
僕を脅かさないで 僕に構わないで

どうか、どうか 放つて置いて 棄てて行つて

何で 思い出したりしたんだろう。 何で あんな事言つたんだろう。

分からぬ、僕何だか可笑しい。

「可笑しい・・・よ・・・」

だけどどうか、救つて下さい、と我が儘を言つてしまつ
んだ。

心の奥ではそう、思つてるんだ。 何時かみたいに普通に笑いたい、
つて。

『アンタの所為だから』

そう・・・僕の所為、
僕の所為で・・・
なのに・・だけど・・どうし
て・・

「つ・・・もつ・・・わかんないよつ・・

どうか、どうか・・誰か教えて下さい。救われる理由、そういうや
なくて
そうじやなくて・・今は言えないうけど 言えるようになつたなら教
えてくれますか

今は言えないけど・・言えるよになつたなら・・もしそんな日が
来たなら・・
・・答えてくれますか？ ちゃんと僕の前で言つてくれますか？

そんなの来ないって分かってる だけど・・
信じたい。 前みたいに何時かみたいに信じたい。
誰かを人を信
じたい。

『絶対許さないから』

誰が悪いんだろう

ピンポン

部屋の中に響き渡るチャイムの音。誰？
こんな泣き腫らした顔で出たくない。どうしよう…。

ピンポン

一回目。仕方なく出る事にした。 ようよと立ち上がり覚束無い足取りで玄関へ向かう。

近所のおばさんだろうか？

少し躊躇つてドアノブに手を掛ける。

「は・・い・・」

ガチャリ、嫌な音がある。この音は嫌いだ。明るいヒカリが暗い部屋の中に差し込む。 ドアを開けた。

「あつ・・空野？」

ドアの向い側にいたのは 氷月だった。

「つ…何しに来たんだよッ！？」

嫌いだとか顔も見たくないとかそんなのじゃなくてただ恥ずかしかった。

こんな泣き腫らした目でばつかみたい。

咄嗟に握っていたドアノブをひいてしまった。

「ま、てよつ」

氷月はドアを押されると僕を見下ろした。少し高い位置にいる氷月。少しだキッとしてしまった。

「な・・んだよ・・」

泣き出しそうになつてしまつ。今すぐ此奴にしがみついて全部話して楽になりたい、と。

変な欲が出てくる。ダメだ、そんなのダメだ。

氷月も泣き出しそうな顔になつた。そして薄く口を開く。

「空野・・好きだ。」

そんな優しい言葉をかけないで欲しい。
うになる。
だって溺れてしまいそ

」・・・」

氷月の顔なんか見れずに顔を逸らした。

やだ やだ やだつ・・！

絶対元に戻れなくなる。
絶対しがみついて嫌になる。突き放した
くなる。

そうだ、氷月たってそうだ。絶対何時か僕を置いていく。

卷之三

？」

「どうか近付かないで欲しい。」
「急いでドアを閉めた。」

自分が戻れなくなる。 氷月にしがみついて 助けを求めて

絶対そうだ・・氷月が幾ら優しくても突き放したくなる。

だつたら・・・だつたら最初から近付かないで欲しい。

これは僕を守る為にやつた事だ。後悔なんてしてない。

後悔・・なんて・・

「・・・ふられた・・

『嫌いになっちゃえよ』なんて予想もしてなかつたふられ方。俺には『どうか、抱きしめてやつてください』と言われたよつな気がする。

「・・・家に何が用?」

「え?」

不意に声がして、声がした方を振り向くと空野に似たよつな雰囲気の少女が立つていた。

空野とは少し違う薄い茶色の髪に大きくて黒い澄んだ瞳。

可愛い部類に入る、背の低い少女は買い物袋を片手に持つて俺を見ていた。

「えつと・・君の家?」

「そうだけど・・

もしかして、妹だつたりするのかな。

空野の両親はずつと前に亡くなつたつて聞いてたから独り暮らしかと思つたけど・・妹がいたのか。

何で独りで驚いていると、空野の妹らしき少女が不思議そうに俺を見て首を傾げている。

人の家の前で、確かに俺は変な人だ。

「えー・・・・と・・ちょっとお姉ちゃんに用があつて・・・

とりあえず、適当に言つてみると少女の表情がみるみる曇つていく。挙げ句の果てには俺を睨み付ける。先程の幼くて可愛いロリーな仔とは思えないような表情だった。

「アイツに? 何の用?」

幾らお姉ちゃんだからと言つて「アイツ」って・・・。 どんだけ中の良い姉妹なんだろうね・・・って違うだろ。

「いや・・・もう用は済んだんだけど・・・

「・・・・そうですか・・・。」

少女はホッとしたような表情になると、ドアの方に近付いた。そして此方を振り返ると、にっこりと可愛い笑みを浮かべる。

「・・・アイツにあんまり近付かない方が良いですよ。殺されますか

少女はそう笑顔で言つと家の中に入つていった。

「ひ

恐くて怖くて仕方がない。 嫌われたって良いの。 嫌ろ嫌われなければいけないのに。 嫌だ 怖い。 嫌われるのが

怖い。

「・・・ひ・・・づき・・・」

何で名前を呼んでしまっているんだ？

僕はバカみたいに泣いてしまってるんだ？

ガチャ、嫌な音がする。扉が開く。後ろなんて振り向きたくもない。

「・・・彼氏か？良い」身分だな。」

この仔は妹だ。今年中学生になつたんだっけ。買い物から帰つてきたのかな。彼氏つて氷月の事かな。沢山言葉が出てくるけど口には出さなかつた。なぜなら出した瞬間じぶんわれてしまつから。

「あの人顔格好良かつたねえ。何でよりによつて御前なんか選んだんだろうねえ？」
そのウチこじらわれるつて言つたのじゃ・・・

去り際にぱつりぱつりと呴かれた言葉。言われて当然だ。酷い事だけど。

何で平氣でいられるんだろう。それとも聞こえてなかつた？誰かの事で頭がいっぱいだつたのかな。本当に「良い」身分だ。

許されないつて分かつてるのに。とまらないのはなんで？

次の日の朝は自分でも氣付かないくらい魂が抜けたように氣を失つていた。

田が覚めたと思つたら、身体が動かなくなつて咄嗟に咳いたのが

「学校に行きたくない」

誰が聞いてるでも無く自分で聞いてる訳でも無い。
何をしているんだうな・・身体が動かない。

このまま・・このまましんでしまおうか、何て考えてしまう。

何処にも行きたくないし何もしたくない
誰にも会いたくないし動きたくない

歩くのも学校に行くことも声を出すことも瞬きをすることも

何も、したくない。

何も出来なかつた。

「・・あつー あのつ先生つ今日・・ 空野さんは・・

「おー草原か・・空野は今日風邪だつて電話があつたぞ。」

「そう・・ですか・・」

自分でも分かるくらい私は今凄く落ち込んだ顔をしている。

先生に頭を下げて、歩き出した。何処に行くでも無くただ歩いた。
つきちゃん、大丈夫かな。風邪、って本当かな。
どうして私に何も言ってくれないんだろ?

私が無力で力になつてあげられなくて寧ろ呪おとこだからへ
邪魔なの？要らないの？信用出来ないの？

「……でもねつせひやん・・独りで抱え込むのも良くないよ・・

「ひーっめ」

「ふひー？」

何処からともなく聞こえた声。つい変な声を上げてしまつた。
慌てて後ろを振り返ると由衣ちゃんが立っていた。
由衣ちゃんは此方に一歩近付くと申し訳なさそうな顔になつて頭を
下げてゐた。

「「」みんなでこつ・・・」

「・・・由衣ちゃん・・・？」

私は焦つてしまつた。謝りてしまつたから。さうしてみづへ。
何も言わなかつた・・・言えなかつた。

「・・・あたし・・・・・香代が怖くて・・逆らえなくて・・・・・シ

由衣ちゃんは頭を上げたまま泣き出しちつた。
私はびづくの事も出来ずにただおりおりするだけ。

「あたしの・・・あたしが逆らえないから・・シ・・・由衣ちゃん・・空
野さんまで傷付けて・・しまつて・・本当に申し訳なつて思つて
る・・だけど・・だけど・・香代にびづいても・・・逆らえ・・無

くて・・

由衣ちゃんは冷たい床に座り込むと俯いたまま更に泣き出してしまつた。

私は急いで駆け寄つて由衣ちゃんの背中をなるだけ優しく撫でた。

「うん・・私も・・つきちゃんが苛められてても何も言えなくて・・莫迦みたいに泣き続ける事しか出来なくて・・・・由衣ちゃんの事怒つてないよ。確かに・・ちよつと寂しかつたけど・・でも大丈夫だよ・・つ私は大丈夫・・」

言葉と言葉が複雑に絡み合つて頭の中がぐちゃぐちゃで自分でも何を言つてるか分からなかつたけどどうやら言つたいたい事は由衣ちゃんにはちやんと伝わつたよつて由衣ちゃんと仲直りできて心中のもやもやとした真つ黒な霧が少しだけ晴れた気がして嬉しかつた。

「・・・あ・・・そだ・・・ひめ・・あたし言わなきやいけない事があるの・・」

「・・・な・・・に・・・・?」

「香代がね・・・今度はいひす勢いで空野さん苛めるつて・・」

一瞬頭が真つ白になつた。『殺す勢いで』。
誰を? 何を? とても怖い事。

「・・・どうこう・・・どうこう事・・?」

「・・・え?」

もつ一度聞き返してしまった。どうこう意味、どうこう訳
そんなの知りたくない・・・ケド。何故か聞いてしまった。

つきちゃんがいわれる・・?

そんなの嫌だ。 だつて・・ねえ、人つて簡単に しんでしまつん
だから。

何時だつて・・何時だつてね、いつまでもいたいんだよ・・
?

本気になつた時は・・ね。 香代さんはそれが出来る。
香代さんでなくとも出来るけれど・・。

そんなの・・絶対嫌だ。

「やだ・・そんなの・・やだ・・み・・」

涙も止まつていた。俯いて呴いた。消えかけた声で。

由衣ちゃんは心配そうに私の顔を覗き込んでから同じように俯いた。

「・・御免なさい・・あたし・・・・・・辞めようつて言つたん・・
だけど・・」

脳内に蘇る映像。 そんな事より・・・そんな事、より?

もつそんな事、何だ。『アレ』は。

もつそんな事、で終わらせられるんだ。

・・私も、強くなつたね。

「わ・・たし・・私が・・しんでもいいから・・・」

「え？」

「香代さんを止める・・っ」

気付いたらそう呟いて、立ち上がっていた。
先程までの泣きじゅくってた弱々しい表情は何処かへ消え、凛々しい表情だつただろうか？

ちやんと云わつた？この一生懸命。誰に、何でも云わなこよ。

ねえ、香代さん。

「待つてっ」

私が歩き出した時だつた。後ろから由衣ちやんの声が聞こえる。
振り返ると、ひっしり涙を堪えながら立っている由衣ちやんが居た。

「あたしも・・っ・・あたしも行くつー」

何が信じられる訳でも。何か貰える訳でも。何か得する訳でも無い。

ただ私には。してあげられる事も何も無かつたから。
これくらいは・・アナタに。あげるよ。

「・・・うんっ」

これは、ケジメで償いでそして戒め。自分との勝負だ。
つきひやん、この場を借りて勝負するよ。御免ね。

でもこれからはちゃんと守るから。 今度は私が守つてアゲルから。
ちゃんと・・壊れてしまいそうなつきちゃんと言葉をかけてあげら
れるよつて
強く、なるから。

空野は学校に来なかつた。 僕の所為・・だらうか・・。
昨日の空野の妹の発言が気になつて仕方がなかつた。

「 いりされますから」

前に空野が「人をころしてしまつたんだ」と言つてた事があつた。

あれは、どういつ意味・・? 空野、本当にそんな事してしまつた
のか?

違う、そんな訳・・無い。

俺は信じてるから。 信じるから。

もう 笑つて欲しい

「彼方くん、ちよつと良いかな?」

不意に後ろから聞こえた声。振り返ると、元凶・・香代が立つてい
た。

「何?」

とつあえず微笑んでみた。 本当は凄く怒つていたんだけど・・。

香代は嬉しそうに笑うと俺の腕にべたあーっと抱きついて俺を見上げた。

「彼方くんってえ好きな人とかいるのかなあ？」

妙に甘ったるい声を出して香代が聞いた。

ぴしつ

この人は 何処で道を間違えてしまつたんだろうね

もつ 可哀想としか言つようが無い

「・・・居るけど？」

「本当にー?・・それってえ・・誰え?」

ぴしつ

誰？

莫迦じやん 分かってたのに

最初から ・・・ 最初から決まってた？

悪い奴は誰か何で 最初から・ 分かってた？

『俺は悪くない』 そう言い切れない ・・・ のは・・。

分かつてたから？

「・・・少なくとも誰かを苛めるような仔は好きになれないよ」

「誰の所為でこいつなつてしまつたのか何て簡単な事だ。簡単。何だ。

全部全部 僕が悪いんだ。

田の前に『居た』のは触れたら溢れ出しそうな『嫉妬の塊』。

今もだけど、それ以前にも空野がケガした時は何時だつて俺はそれに触れていたのかもしれない。

「ふーん・・そおなんだあ・・」

香代から先程の笑顔が消えて、冷たい微笑に変わった。
怖くて、寒い。 これは、何？

空野はこんなのを毎日みてたの？

「『せつたいゆるさない』

香代が小さく呟いた言葉。香代はその後走つて教室を出て行つたけど
その言葉だけが耳に付いて離れなかつた。

時が止まつたみたいに独り呆然と突つ立つていた。

「・・か・・なた・・君・・・?」

「へ?」

自分を呼ぶ声が聞こえて一気に俺の中の時間が動き出した。
目の前には、田芽ちゃんと由衣が立っていた。
由衣は確か・・香代と一緒に空野を苛めてた奴・・。
まさか田芽ちゃんを苛めてたり・・!?

でも何で二人の目が腫れてんの?

「彼方君・・・今香代と話してたんでしょう?」

由衣が俯いてそう聞いた。聞かれたの・・かな?

「あ・・ああ。」

俺が頷くと、由衣と田芽ちゃんは顔を見合わせてその後田芽ちゃん
が口を開いた。

「つきちゃんのこと・・何か言つてなかつた?」

「空野の事・・?」

暫く考えた。言つてたつけ?俺は「ぜつたいゆるさない」の部分し
か覚えてなかつた。あれは誰に向けられた言葉・・?俺?それと
も・・空野?

「・・・誰に言つてゐるか分かんないけど、『せつたこゆるやな』って

とりあえず言つてみる事にした。その言葉を聞くと、一人はまた顔を見合させて

由衣はスグに俯いてしまつた。由衣は泣き出しちやつになつた。

「・・・それ・・・多分空野さんに対してもだよ」

「・・・は?」

由衣が俯いたまま言つた言葉。それに硬直。空野に対して、『どうして?』もしかして俺が空野の事好きだつてばれたり・・?

それとも俺への怒りが空野に・・・『どうして?』何で?

「昔、ね・・・あたし聞いた事あるんだ。『どうして空野さんを苛めんの?』って。

そしたらね・・・香代・・・『どう答えたの。『親友をこうされた』って・・』

「うひ・・・された・・?」

嘘だ

そんな訳・・無い。

空野が人を・・そんな事・・・無いつ絶対・・無い・・はず・・な
のに・・。

「…………嘘だろ…………？」

田井中はといひといひ泣き声を立てて、小さく頭を振った。

「私も…………やう思ひたつよ…………」

「思ひたい…………やう思ひたつよ…………」

何だか俺まで泣き出しあつになつてしまつ。

何で？…………？

嘘つて言つてくれよ。

なあ、月歌

「嘘だよ。」

誰も詫なない部屋。独りよつりと亥いた。

『生きてこいる感じ』『がしなこ』。

「嘘だ。嘘だ。嘘だよ。」

わざわざから僕は独りそつそつと亥いた。全部嘘なんだつて。やう思わせてよ。

「僕が…………やう思ひたつよ…………」

「

そう。誰かの笑顔もアイツの優しさもあの子の言葉も僕に対しては惨いくらい正直で真っ赤な嘘なんだ。

傍に居るよ

違う

何でも言つて

違二

好きだ

これ以上田の前で誰かがしんでいくのは見たくないクセに
これ以上の苦しみに耐えられなくて 孤独は辛くて寂しくて嫌だから
誰かを頼つて依存して迷惑かけて見捨てられる

そんなの目に見えてたのに 分かつてたのに
分かりたくない。 分かりたくないよ・・ツ そんなの嫌だツ

だつてもう僕はツ・・口芽に・・氷月に・・

「依存して・・・しまつたから・・・」

失いたくない、と。思つてしまつたから。
絶対に離れたくない、と。思つてしまつたから。

気付きたくなかった。 分かりたくなかった。 そんなの そんなの・・

滅茶苦茶だ 。

イジメよりも殴られるよりも ずっと痛い。

なんでこんなに痛いんだろう。

なんでこんなに袁しいんだろう。

もう『びつでも良い』で終わらせる事は出来ないの?

『興味ない』で終わらせる事は出来ないの?

ねえ・・誰か教えてよ。

独りが楽だと呟つておきながら 誰かの傍に居たいと想つのは
樂よりも悲しさの方が強いから。
壊しても良いから誰かの傍に居たいと想つてしまつのは
僕が我が儘で寂しくて弱いから 迷惑を かけてしまつんだよ。

気付いたかな。 僕はその事に。

気付きたくなかった、 僕はその言葉を繰り返した。

繰り返し繰り返し 誰に何を言われても僕は後悔を繰り返した。

『絶対許さないから』

後悔は勿き罪てる事無く 僕の全てを飲み込んだ。

『『アンタがしねば良かつたんだ』』

現実の声と過去の声が重なる。
誰が誰に言つてるの？

「ひどい」

思い浮かぶのは氷月や日芽の顔。

みんなが僕に言つてゐるの?
ねえ そんな顔しなくてよ

僕が悪いのなら
謝るから。

僕が悪いのなら
局なくななるから

そんな顔
しないで。

「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」

消えるから
居なくなるから 謝るから・・・

卷之二十一

氣付いてしまってこのめんたるい

生れてしるねんなむ

・・・の・・つ・・空野ツ・・！

誰が僕の名を呼んでくれてるの？

· · · 氷月 · · · · ?

「うれしかったです。うれしかったです。うれしかったです。」

何でみんなそんな顔してるの・・・?
田芽・・・僕が悪いの?僕の所為でそんな顔してるの・・・?
田芽

「・・・つ・・・じめんなさこつ・・・じめんなさこツツ・・・」

・・由衣・・? 何で謝るの・・? 僕が悪いのに・・何で?

「・・・ねえ・・・みんな・・・・笑つてよ・・・そんな顔・・・しない・
で・・・」

ねえ・・・御願い・・・これで最期にするから。僕の我が儘聞いてよ。

! ! ! !

誰が僕の願いを聞いてくれるの？

誰が僕の前で笑ってくれるの？

誰が僕に声を掛けるの？

誰が一緒に笑ってくれるの？

誰が僕の我が儘を聞いてくれるの？

狂つたような日芽の叫び声が聞こえて 僕の意識はまた途切れた。

僕は覚えていない。 何でみんなが彼処でああやつて泣いてたのか。
僕は覚えていない。 何時部屋から出て外に出ていたのか。

だけど僕はその時 もう全部終わってしまった、と想つた。

気が付いたら 真っ白な部屋に居た。

気分は最悪。 気持ち悪いし 吐き気がする。

体中あちこちが痛い・・・ そして怖い。

このままこの真っ白な部屋に焼き消されてしまいそうな気がする。

ガラガラ、と扉の開く音がして足音が聞こえた。

白いカーテンの向こう側で黒い人影が揺れて此方に近付いてくる。
カーテンの向こう側から、誰かが入ってきた・・日芽だ。

「・・・！？・・・つきちゃん・・・・つきちゃんッ！」

日芽は一瞬僕を見て驚いたように目を丸くする。

その後に急に泣き出して僕の所に駆け寄ると僕に抱きついて泣き出
してしまった。

「ひ・・め・・？・・・泣いてるの？」

僕は戸惑いつつも日芽の頭を撫でた。そんな事をしていると、今度は氷月と由衣がカーテンの向こう側から現れた。

「空野……気が付いたんだな……」

「よかつた……」

二人は心底安心しきった顔になつてそう僕に声を掛けた。

日芽は相変わらず泣き続けていて、僕は意味が分からずに不思議そうにみんなを見た。

「……空野さん……三回間も……ずっと眠つてたんだよ。」

「……は？」

由衣が口に出した言葉につい声を上げてしまった。

ずっと眠つてた……？

「覚えてないのか？空野……屋上から落ちたんだぞ。」

頭の中が真つ白になつて、何秒か後、急に涙があふれ出した。

「お……ちた……？」

悲しみ苦しみ悔しさ虚しさ 複雑に絡み合つて涙が溢れる。

「で、でも……大したケガじゃなかつたし……よかつたよな……。」

慌てて氷月がそう声を掛ける。 だけどそれは逆効果だった。

余計に涙が溢れて来て止まらなくなつた。

「・・・おく・・じょうから・・・なんで・・・」

なんで・・・？ 日芽の表情も氷月の言葉ももう分からなかつた。
頭の中にあるのは

なんで僕が生きているのかと言う事

死ねなかつた。死ねば良かつた。僕は生きてちゃいけないのに。
その方があるの子も幸せだつた？ みんなもそうなんだろ？

「・・・・・死ねなかつた・・・」

どうして屋上からとかよりも 何時学校にとかよりも
その事の方が自分にとつては大問題で

頭の中に出でくる言葉は『死ねなかつた』だけだつた。

僕の頭の中はその事でいっぱい

日芽の泣き声が止まつた事とか
由衣の泣き出しそうな顔だとか
氷月の強張つた表情だとか

自分の頬を伝う生暖かい涙とか 全部分かんなくて

後悔してて 悔しくて 苦しくて 悲しくて 虚しくて
変な感情 ぐちゅぐちゅで じつしたら良いのか自分でも分かんな
くて

ただ 泣いた。

今日の前に居る人 それに嬉しくて泣いたのか
自分がしなくて それに悲しくて泣いたのか 分からなかつた

あれ・・可笑しいな、 今日は何か 何でも言ひやいやつな気分
だよ

泣きついて 繰り付いて 全部話して 楽になりたい

戒めとか同情とか嘘とか もうじつでも良い

嘘でも偽りでも夢でも 誰かの優しさが 欲しいよ・・・

「う・・つ・・うう・・つ・・」

やつと自分でも気付いた。 号泣してた。
ベッドの脇に立っていた氷月の服の端を、ギュッと握んで声にならな
い声で呟いた。

氷月には届いたかなあ・・・。聞こえたかなあ。

「助けて」

抜け出したいような。

このまま此処に居たいような。 变な気分。

このまま此処でこの部屋に焼き消されても良いような 気がする。
それでもきっと 幸せ と呼べるのかもしれない。

ぽんやりと 眺めた天井は光を帯びて余計に真っ白に見えた。

「つきちゃん・・・！」

急に耳に飛び込んできた聞き覚えのある声。

声の主を捜して顔だけを動かすと 白いカーテンの向こう側に人影を見つけた。

「咲・・?」

声の主の名前を口にすると、白いカーテンが急に開いて口にした名前の人形が飛び込んできた。

喜びに満ち溢れた笑みで僕に笑いかける。

「つきちゃん・・良かつた・・」

日芽は心底安心したようそう呟くと、僕の寝ているベッドの脇にある椅子に座つてキヨシと僕の片手を両手で握つた。

「今はもう元気？」

「え・・・うん・・まあ・・

日芽の質問に戸惑いつつも答えた。

元気・・といえれば元気でそうじやないと言えればそうじやないようないいふうな変な感じだったから。

「そつか・・良かつたあ・・

また日芽は安心したようそう呟いた。

元気つて言つて良かつた、と思つた。

「つわりません・・昨日何で此処に居るか・・聞いたよね？」

日芽は恐る恐る僕にそう聞いた。

此処に・・病院に何で居るのか。 昨日、そつ・・と言えれば聞いた・・

ような。

「屋上から落ちた」、そつ誰かが言つてたよつた気がする。

僕はこくつと頷いた。

「御家族に電話したらね、妹さんが・・放つて置いたらその内勝手に死ぬでしょ、って・・言つてたんだ・・

わかつてた事だ。

「そ・・つか・・」

「だから・・だからね・・！私がお世話をうけて言ったの・・！ほ
ら、着替えとか・・大変、でしょ？だから・・あの・・迷惑・・だ
ったかな・・」

田芽は終わりの方になると段々小さな声になつてついには黙り込んでしまつた。

そして俯いた。その後にぐすぐすといつ泣き声が聞こえてくる。僕は驚いて目を丸くした。慌てて重たい体を起こして田芽の顔を覗き込む。

「いたた・・つ・・ひ・・田芽・・？どうしたの・・つ？僕なんか・
・痛つ・・ひ・・め・・・・泣かないでよつ・・田芽・・つ」

僕は身体に走る痛みを堪えながらもひつしで田芽に声を掛けた。田芽は泣きながら顔を上げると「じ、じ」と急いで涙を拭つた。

「「めん・・」めんね・・つきちゃん・・・・つきちゃんはこんなに頑張つてるのに・・じつして・・じつしてこんな・・」

田芽はまた泣き出したかと思うと次々に大粒の涙を零してそして今度は大声で泣き始めてしまつた。もう自分でも手のつけようが無いくらい田芽が号泣しているので

僕はまた驚いたように固まつた後に痛い身体を引きずつて田芽を抱きしめた。

「・・・・・ありがと・・・田芽・・」

僕の為に泣いてくれて、この面葉ほむの心中で弦いた。

誰もが泣いた

僕の前で

みんな泣いた

僕の前で

「御前が殺したんだ

みんないうんだ

僕を指差して

その真ん中に何時も『あの子』が居た。

自分の妹であるハズのあの子だ。

まだ小学生だった。

「おまえが おかあさんとおとうさんを じりしたんだ

あの子は泣きながら そう言った。

「僕は駄目な人間で・・生きてちゃ駄目な人間なんだって・・

ぽつり、ぽつりとつきちゃんは話し始めた。

私が泣き出しちゃって、その後に彼方君達が来ててくれてやっと泣き止んだ後に

つきちゃんが話し始めてくれたんだ。 「ひとをこうした」の理由を。

「妹はね・・成績優秀で何でも出来て僕より可愛くてとっても良い仔だつたんだつて・・。あはつ・・変でしょ?妹の事なのに、だつた、なんて・・他人事みたいに・・・・・でもね・・本当に『他人事』なんだよ・・僕とあの仔は血がつながってるだけで・・・・・それ以外は何でも無いんだよ・・」

つきちゃんは、自嘲気味た笑みを零してそう言った。

私も彼方君も由衣ちゃんも何も言えなかつた。

「口も聞いた事無くて・・親とも・・もちろん妹とも・・・。

妹も親も僕の事は家具の一部だとも思つてたんじゃないのかな・・

それから・・僕が中学校に上がつたばかりの時・・。

僕が何時も通り 学校から出て、家にも帰れずにふらふらと公園で遊んでたんだ。

そろそろ家に帰らうと思つて、プランクから立ち上がり歩道に出た時。

右の方からお父さんとお母さんが走ってきたんだ。

僕に向かつて走ってきてくれてるのかと思つて・・・とっても嬉しかつたんだ。

左側に妹が居て・・・一人は其処に行こうとしてたんだけどね。

僕は嬉しさで我を忘れていたのかな。

小さい頃からただ両親に認められたくてひつしに頑張つてきたからね。

『お母さんっ・・・お父さんっ・・・』

僕は無我夢中で一人に抱きついた。

一人は僕を引きはがそうとして藻搔いた。

僕は我を忘れていて離せなかつた。気付かなかつた。

一人は躊躇けて 道路側に倒れたんだ。

『おとーさん・・・っ!・!・! おかーっさんっ・・・!・!・!』

あの仔の 叫び声が聞こえた時。
同時にとても大きな音がした。

『僕が殺したんだ』

目を開けると其処は一面血の海でね。

青い車が赤く染まつてたんだ。

『僕が殺したんだ』

頭の中にはその言葉しか出て来なかつた。

『人殺し・・・つ・・・人殺しッ！――！――！――！』

あの仔が叫んだ。僕に向かつて 泣きながら。

氣付いた時には一面真っ黒な服を着た人で埋め尽くされた場所だつた。

ひそひそとみんな僕の方を見ながら何か話してゐる。

『・・・やねえ・・・まだあんなに・・・いのに・・・

僕がやつたんだ

『怖いわねえ・・・まだ中学生・・・しょ

僕がころした

『妹さんはあんなに・・・なのに・・・

僕がころしたんだ

僕が 『あんたが死ねば良かつたのに』

途切れ途切れに聞こえてくる声は僕に対しての罵りの言葉だつた。でもそれさえも 真実だと 本当の事何だと 思つてた。

『僕がいけないんだ。僕は悪い仔なんだ。僕が死ねば良かつたんだ。』

それから毎日呪文のように呟いてた。

『僕が殺したんだ。僕がお父さんとお母さんを僕が僕が僕が』

誰も違うよ、とは言ってくれなかつたから

そうだ御前が悪いんだ、周りの人はみんなそういうから

それが本当の事なのかな、そうだ。本当の事なんだ、そう思つた。

悪いのは全部僕で
僕は駄目な人間で
あの仔とは違う。

『消えちゃいたい』

それすらも贅沢に感じた。

『絶対許さないから』

そんな時 美優に出会つた。

家にも学校にも何処にも居場所が無くなつた僕は何時も人気の無い公園のブランコの上でぼーつとしていた。

頭の中では『僕が悪い』この言葉だけが再生されて 何も考えら

れなかつた。

『あなた何時も此処にいるね。何してるの?』

とても、可愛い人だと思った。

僕より背がちょっと高く可愛いけど大人びた顔をしていた。
僕の前にしゃがみ込んで俯いてた僕の顔を覗き込んでその人がそう
言つた。

光が見えた気がした。

『私、美優！よろしくねっ！』

につこりと優しく微笑むと僕の手を取つてそう言つた。

誰かが僕に向けた笑顔。

最初で最後だつたのかもしれないね。

それから僕の居場所は

美優の居る公園のブランコの上だつた。

美優は何時も僕と遊んでくれた 沢山話をしてくれた
学校の事 家族の事 自分の事
・・親友の、事。

何を聞いても良かつた

美優の事ならなんでも知りたかつた。

何時の間にか 僕は美優に 依存 していた。

大好きだ、って心から思った。

ずっと傍に居て欲しかった
どんなカタチでも

ずっと傍に居たかった

だけど それもそう長続きしなかった

美優には1人の親友が居た。

それは僕では無くて『香代』という女の子だった。

「香代・・・?香代って・・まさか・・

由衣が慌てて口を挟む。 僕は頷いた。

「そつ・・香代・・嶋原香代・・だよ。」

『許さない・・私はアナタを絶対に許さないから・・!』

狂つたように泣き叫びながら 走り去つていく

僕から逃げていく 1人、また1人

近づいてきた人はみんな死んで、消えて、居なくなつた。

気が付くと、 1人、だつた。

僕は何時もその親友の事を聞かされていて、会いたいと思つていた。

『可愛くてね、頭も良くてね、すつごく優しくて良い子なの!』

美優がそう話していたから。

『月歌ともきっと仲良くなれるよ!』

美優が仲良くしてゐる子なら、きっとそうなんだうつと思つた。会つてみたかったんだ。

僕が初めてその親友と会った日。

高校に入った時だった。

美優とそれから…その親友と同じ高校で同じクラスだった。

『この子が私の親友の嶋原香代ちゃんですっ』

凄く美優が嬉しそうに話すから。

『よろしくね。空野さん。』

僕もつられて笑ったんだ。

『よ、よろしくっ…！』

嬉しかったから。『やつやつて友達の輪みたいのが広がっていく。知り合いが増えていく。

当たり前のことが僕には初めてだったから。

それから約一ヶ月。

僕は二人と仲良くなつて、やつと『普通』になれたんだと思つた。何時か憧れた、普通の世界に僕は今居るんだ、と。

家に帰れば、あの子に色々言われるけど

それでも、学校に行けば一人に会えるから。憂鬱だった学校があの頃は天国だった。

でもある日を栄え目に天国は地獄に成る。

親だった人達を 僕が殺した日。

それがあの日だった。

僕はひときわ落ち込んでいて、誰とも会いたくなくて
ぼんやりとしか見えてない視界で街の中を彷徨っていた。

その日は丁度学校が休みの日だった。
家ではあの子が泣き叫んでいるだろう。 居場所はもう何処にもない。

僕は生きてちゃいけない、

この日だけは、そう思つてしまつ。

どんなに誰かが微笑みかけてくれても

『月歌…………ツー』

悲しみは突然やつて来て

楽しさを奪つて去つていく。

信号が赤だった。

僕には全部モノクロに見えた。

そもそも信号なんて見えなかつた。

何も、見えなかつたんだ。

『月歌…………ツ！』

声が耳に届いた時はもう遅かつた。

目の前には、何時かみたあの光景が広がつていた。

僕のモノクロの世界に色が付いた。

真つ赤な、世界。

大切だつた人の 血で赤く染まつた 真つ赤な世界だつた。

『ひとりじりし…………ひとりじりし…………！』

何時か聞いたような声が、ずっと遠くで聞こえた。

僕は赤信号の時に、道路を歩いていたらしい。

僕は全然気が付かなくて……。

気付いた時には、僕を守ろうとして

道路に飛び出した美優の血で赤く染まつた道路に座り込んでいた。

僕の所為

僕が殺した

ひとつごろし

その言葉達が頭の中を駆け巡った。

僕がいけないんだ、僕の所為なんだ、僕が殺したんだ。

僕がまた殺した、ひとつごろし、ひとつごろし・・ツ！――！――！――！

誰かの声と自分の言葉がぐけやぐけやに成る。

美優はもう居ない。

病院に運ばれたが、すぐに「亡」が確認されたそうだ。

僕は暫く家から出られなくなつた。

何時か誰かを殺した時みたいに。

『また、こりしたんだってね・・・・・！ 酷い奴！ 悪魔！ 御前なんか居なくなればいいんだッ！！！！！！』

毎日妹の罵声を浴びながら、僕は、自分を責め続けた。

でも、そんな時に香代が僕の家を尋ねてきた。

『空野さん。学校にあこでよ。みんな待つてゐるから』

学校が天国だった僕にとって、その言葉は救いだった。
僕は意を決して、学校に向かった。

どうして、ひどいひし、と叫んだ香代がこんな事を言つてくれるのか。

その時の僕には考える余裕も無かつた。

僕は居場所が欲しかつた。

まだ美優がいた頃みたいな。楽しい、時間が欲しかつた。

「・・それで、のこのこ学校についてつたら、苛められて今に至る

つてわけ。」

空野さんは、おかしな話でしょ、といつたように冷たく、笑った。
あたし達は笑う所か言葉さえもかける事が出来なくなつた。

「・・でも、ね。あの頃みたいに一人じゃなかつた。」「

空野さんはそう言つて小さく笑つた。

「日芽も彼方も田の端にいてくれたし、香代や由衣が何時も居て、僕を見てて、僕に話しかけて、僕を傷付けて・・それだけで僕はこの世界にちゃんと居るんだつ、てちゃんと生きてるんだつ、て思つてたんだ。だからそれでも良いかな、なんて」

「で、でも・・そんなのやつぱり良く、ないよ・・その所為で用ちやん・・本当にしにかけたんでしょう・・?」

田芽が慌てて口を挟んだ。空野さんはまた小さく笑うと、そうだね、と頷いた。

あたしが香代と出会つたのは、一年に上がつてからだ。
一年の時も、本当は同じクラスだつたんだけど・・。

あたしは空野さんの苛めを知つていた。

香代は陰でこつそりと、空野を苛めていた。

大勢ではなく一人で。

あたしはそれを見つめつた。一度ではなく何度も。
でもあたしはそれを止める事は出来なかつた。

『これがイジメつていうんじゃない』

見て見ぬふりをするのが一番苛めなんだつて事。 分かつてたのに出来なかつた。

こんな姉ちゃんをアソタは許してくれないだろ。 陽一だつて本当は、そななんだろ。 みんなみんな、あたしには甘い。

あたしが一番、あたしに甘い。

そして、あたしが一番、あたしを嫌つてゐる。

「いめんなさい……」

あたしは何故か謝つた。 やがて謝るの?、 穂野さんがそう聞いた。

分からなかつた。 自分でも。

この言葉は、日暮にも彼方君にも穂野さんにもあたしにも聞える言葉だつた。

あたしは、誰かを傷付けましたか?

「ね、由衣ー！ あんた最近ヤケに帰るの早くない？ 草原さんも彼方君もだしいー・・・。 良く三人で帰つてるみたいだねえ、何でかなあ」

何時ものよつた怖い笑み。 それで香代はあたしに話しかける。

「なんでも、ないよ。」

「ほんとおー？ 親友同士隠し事は無し、つて約束だからね～？」

「うん。 大丈夫、隠し事何てしてないよー」

「誰が、親友だよ。」

「そんな事、思つてないくせに。 何が・・大丈夫、なの？」

莫迦じやん。 あたし。

「あ、あたし、今日用事有るんだつたー帰るねー！」

「そりいえば、空野さん全然来てないね。」

あたしはその場に居られなくなつて、鞄を持って廊下に出ようとした時だつた。

香代の声色が変わつた。低い、声だつた。

あたしはその場から動けなくなつてしまつた。

「まさか会つたり何かしてないよね？ 由衣も空野さん嫌いだもんね？」

「う・・うん・・。 そんな訳、ないじやん。」

あたしは、駆け出した。

まさか、ばれてる？ そんな訳・・

でももしかしたら？ そういうえば香代、こないだ先生と何か・・・

『草原さんや、遠崎さんがおみまいに・・・』

あたしは、誰かを殺しましたか？

「ばれ・・てたんだ・・」

怖い、怖い怖い怖い。 急に恐怖が襲つてくる。

あれからあたし達は毎日空野さんの所に通つていた。
あたし一人の時も、日芽と一人の時も、色々だ。

今日はもう、空野さんの所にはいけない。

何処で香代が見ているか分からない。

何処で誰が、あたしの事を見ているのか・・。

あたしは走つた。 恐くて怖くて。

後ろから何かが追つてきているような気がして、
立ち止まつたら捕まつてしまつような気がして、
ただひたすら走つた。 走つて逃げた。

御免。光汰。 姉ちゃんは、アンタの言つた事、忘れてたよ。

気が付くと、あたしは墓地に来ていた。

「……た……」

4年前にしんだ、あたしの弟の墓が有る所だ。

まだ小学生だった光汰は、苛められていた。

理由は、あたし達は知らない。

昔から身体の弱かった光汰は病院に入院したり退院したりの繰り返しで

だけど学校が大好きで、退院すると同時に何時も楽しそうに友達と遊んでいた。

あたしも家族も知らなかつた。光汰が苛められてるつて事。

光汰は何時も笑つた。 例え病院の中でも。

あたしはそんな光汰を 羨ましいと思った。

『するいよ』

あたしが中学校に入つたばかりの時だつた。

光汰は4年生。 部活とかをとても楽しみにしていた。

でもそんな事は出来ない、つて自分でも分かつてたんだと思う。

光汰はサッカーがやりたいと言つた。

無理だと分かつていてもあたしはガンバレと笑う事しか出来なかつ

た。

ねえ、光汰。 あたしは駄目な姉ちゃんでしたか。

どれも当てはまる。

誰かを傷付けて殺して駄目な奴。

『姉ちゃんばっかりずるいよ。』

あたしはアンタが 羨ましかったんだ。

「・・・由衣・・?」

不意に自分の事を呼ぶ声が聞こえた。

こんな所に・・誰?

声のした方を振り返ると、陽一、が不思議そうにあたしを見ていた。

「よ、ようちやん・・?」

あたしは驚いてようちやんを見上げた。

ようちやんとは意外な所でばつたりと会うなあ、何て思った。

「い、こんな所で、何してんの?」

良かった、今回は泣いて無くて。
こないだ会った時は、あたしは泣いてしまってたから。

一人だけ泣いて 莫迦みたいだつ、て後から後悔した。
辛いのは誰だつてなのに。

「由衣こそ何してるんです?」

「え、あ、あたしは・・光汰の・・墓参りに・・

本当は何時の間にか来てしまつていただけだけど。
そつこえば、去年の命日以来・・来てなかつたな。

「僕もそれと同じです。」

よつちやんはこつこりと微笑むとそう言つて、光汰の墓に近付いた。
そして手に持つていた花の束と墓に供えてあつた枯れかけの花を取り替えていく。

「花・・よつちやんが変えててくれたんだ」

命日にしか来ない弟ふこつなあたし達は、何時も供えてあるのが綺麗な花で

誰がこんな事、つて不思議だつたんだけど・・陽一だつたんだね。

光汰、本当に来れなくて御免ね。

休みの日もずっと番代に、つてこんな言い訳しちゃ駄目だよね。

両親がまだ、共働きだつた頃。

あたし達は近所に住んでいたよつちやんと良く遊んでいた。

光汰もよつちやんを「陽一兄ちゃん」と呼んで本当に兄のよつに慕

つていた。

そしてよつちゃんも光汰の事を弟と同じのよつな感じで遊んでくれたりした。

あたしはそんな二人が大好きで、何時も三人で遊んだ。

『友達が、苛められてたんだ』

入退院を繰り返していた光汰が、もう寝たきりになってしまった時。ゆつくりとあたしに、光汰は話してくれた。

『だから、その仔を庇つたら、僕まで苛められるようになつてさ。』

光汰は、それでもよかつたんだ、と笑つた。
ずっと友達で居られたからよかつたんだ、つて。笑つたんだ。

でも、苛めはどんどんエスカレートしていつたらしく
光汰は誰も救えないまま、この世から去つた。

『姉ちゃんばっかりずるいよ。』

生きていれば、誰かを救う事が出来るから。
友達でも そうじやなくとも

光汰は そう言った。

あたしは、あんたが羨ましかつた。

『 ずるいのはどうだよ、ばーか。』

言つたのは、光汰が居なくなつてからだ。
自分だけ、良い人面しちやつて 居なくなるんだから。

あたしは あんたが羨ましかつたんだよ。

素直にモノを言えて そつやつて友達を守りつとするあんたが

羨ましかつた。

あたしは、 空野さんも口芽も救えなかつた。

そして、 あんたもあんたの友達も あたしでさえも 救えない。

あたしは、 弱虫でしたか。

『 あんたなんかだいつきらい。』

あたしが光汰に掛けた、 最期の言葉だ。

光汰なんか大嫌いだ。

自分は綺麗なままでしんでいくんだから。

光汰なんか大嫌いだ。

何時も思うんだ、彼奴は狡い。

光汰ばっかり。

光汰、なんか・・

そりやつて誰かの所為にしどきたかつただけなんだ。

辛いのは誰でも。

光汰も陽一も・・辛いのに、あたしだけ一人、誰かの所為にして・・

『姉ちゃんばっかりずるいよ。』

ああ、ホントだね。

狡いのはあたしの方だね。

あたしは、卑怯だ。

弱虫で卑怯で狡くて・・・最低だ。

何年経つても、年を重ねるだけで

誰も、救えないよ・・光汰・・。

莫迦みたい、ほら、また泣いちゃつてさ。・。
泣き止みたハのニ、
疾が止まらない。

「うつ・・・・ツ」

「ゆ、由衣？」

よしけんが慌てて近寄つてくる。そして優しく背中を撫でてくれ
る。

「よひぢや・あたし・あつ・たしつ・つ」

駄目だ、泣き止まなきや。迷惑、掛けてる。

光汰だつて、絶対・・

「うん？」

莫迦なのは何時もあたしの方だ。

よつひやんば、そんな酷い奴じゃないんだ。

何時もちゃんと、こうやって笑いかけてくれるんだ。

なんだあ、あたし、まだ頼つても良いんだ

「…………たすつ……けて……」

誰にも言わないって決めた。
もつ迷惑かけないって。

香代に使われてる事も 何もかも
あたしとあたしだけの秘密にしよう、つて。

だけどね、 そんなの 余計迷惑掛けるだけだつて分かったんだ。
だつてあたし、 やっぱりこんなに泣いちゃうからさ。

それで「何でもない」つて やっぱり、 助けを求めるよつもずっと
迷惑だから。

よつちやんも光汰も こんなあたしを見捨てるほど
酷い奴じゃない……。

なんだあ、 あたし、 一人で我慢して、 莫迦みたいだね……。

「…………つ…………つ…………つ」

「……頑張ったね？」

ぎゅつ、 とよつちやんはあたしを抱きしめてわづわづしてくれた。

ああ、 あたし 幸せなんだなあ……。
一人で泣いて莫迦みたいだ。

だつてこんなに近くに慰めてくれる人が居るんだから。

光汰、大好きだつたよ。

「・・氷月・・一人・・・・?」

いい加減見慣れた病室。ベッドの隣に座つてるのは制服姿の氷月。

何時も一緒に来る、田芽と由衣が居ない。

・・僕、この人ふつたんだよなあ・・。

「由衣はさつと帰つちゃつたし、田芽は用事があるつてさ」

こつやつて氷月と落ち着いて一対一で話すのつて初めて・・かも。何時も僕は、目で追つてたけだつたし・・。話しかけてくれたらそれはそれで、・・避けちゃつてたし。嬉しいのかなんのか分からぬ変な気持ち。

分かるのはただ、ドキドキするだけ。

「あの・・や、・・こないだは御免な?急に変な事・・」

告白の事だらうか・・。

「別に・・氣にしてないよ

。色々あつて、ぐちやぐちやしてて・・良く、分からなかつたけど・・

今思えば、『コレって、何思いってな事になるんだよね。

でも、僕に氷月は勿体なすぎるよ・・。

でも僕は最初に氷月に話しかけられた時に信じよう、って思つたんだ。

僕はこの人に依存するつて分かつてしまつたから。

僕はあの日からずつと信じてた・・。

氷月が僕を裏切る事を。

見捨ててしまわれたなら、僕はきっともう誰も信じたいとは思わないだろう。

それで良かつたんだ・・良かつたのに僕は・・。

どうして拒絶してしまつたんだろう

氷月を受け入れて、邪魔だと思われるまで依存してしまつて

それで捨ててしまわれば良かつたのに

どうしてだろう それでも拒絶したのに
なんでまだ待つてゐんだろう

氷月が笑いかけてくれるの、いつもやつてぼーっと眺めて待つてたり
するんだろう

『桜、好き?』

入学式の時、最初に氷月と話した時以来、僕は氷月を田で追いつこうになつた。

顔も中身も格好良いし優しいし莫迦だけど誰とでも仲良く出来て
・・羨ましかつたのかな。
自分とは正反対の氷月が。 自分も、あんな風に素直に笑えたらな、
つて。

羨ましくて妬ましかつた。

あの子と・・妹と同じように僕が欲しいモノを沢山持つているクセに
僕なんかとは住む世界も何もかも違うのに

僕なんかに優しくするんだ。 莫迦みたいに優しく笑いながら。

「元氣でしたか？」

私の目の前には、今日私が変えた花とあげた線香とぴかぴかの石で
出来たお墓。

「長い事来れなくて御免なさい・・友達が、入院しちゃつててお世
話してたんですね。」

私は何時も此処に来ると、いつやつて話しかける。

本当は、アナタが生きていて目の前で沢山の感じた事や見た事を話
したいのに。

「私もちゃんと友達が・・出来たんですよ・・お母さん・・。」

昔から引っ込み思案な私をお母さんは何時も優しく包み込んでくれ
た。

ちょっとずつ仲良くなつていけばいい、と微笑んで教えてくれた。

私の憧れで、私の全てだった。

「私、独り暮らしも頑張ってるんです、・・・叔母さんに迷惑かけたくないから」

お母さんがしんでから、暫くお母さんのお姉さんの所に居候させて貰つたけど

今は叔母さんの支援で独り暮らしをじて。丁度今の中学校に入つた時から。

お母さんが居てくれたら・・・と思う時は今でもあります。

料理上手なお母さんに大きくなつたら沢山料理を教えて貰つと約束したのに・・・。

私は何一つ教えて貰つてないです。

でも、もう・・独りじりじりません。お母さんの前で泣いたりしません。

「もう・・独りじりじりませんから」

例えお母さんが父に殺されたとしても。
その現場に私が居合わせていても
もう、泣かない。

子どもみたいだつて事くらい分かつてるんだ。
こんな彼奴が望んでなかつた事くらい知つて。

ただ、私が許せなかつたんだ。

私は私が許せない。

だから誰かの所為にしてしまったかった。

御前の所為だ、つて罵つて自分の正義を貫きたかった。

でも、無理だった。

私は自分がキレイ、だから許す事が出来ない。

でも、彼奴も嫌いだから 許す事が出来ない。

・・・でも、今日は、謝ろうと思つたんだ。

こんな事ばっかりしてると、美優に・・叱られるから。

「・・・御免。一人にしてくれるかな。」

音も立てずに入つてきて、氷月の肩に触れそう言つた。

氷月は驚いたような表情で、僕を一度見た後こくりと頷いて病室を出て行つた。

僕は、どうしよう、と思つてたけど

何時もとは違うその人の顔を見て何となく大丈夫そうな気がした。何が大丈夫そうなのかは自分でも良く分かんないんだけど。

「・・・御免なさい・・空野さん・・」

深々と頭を下げるといき出しそうな消えそうな声でそう謝られた。顔を上げた香代の瞳には涙が溜まっていた。

「本当は全部私が悪いんだ・・」

香代は僕と眼を合わせずに、斜め下の方を見て話し始めた。何時ものような乱暴な口調だけど、冗談ではないようだ。

「・・・私・・・美優がしんだの信じられなくて・・・
私が止めれば良かつたんだって・・・ツ・・・思った・・・空野がしね
ば良かつたって・・・ツ・・・・・そしたら・・・段々空野が悪いみたい
になつて・・・私・・・」

香代は我慢できずに泣き出しちゃった。

何だか僕まで泣きやうにな。 そう、僕がしねば良かつたんだ。
「でも・・でも・・良く分かんなかつた・・美優がそうまでしてア
ンタを護りたいなら・・それで良いつて、そう思つたけど・・信じ
たくない自分が居てツ・・
私の所為だつて思いたくなかった・・だから・・あんたを苛めたん
だ・・ツ・・だから・・」

香代はもう一度深々と頭を下げた。

「・・・ごめんなさい・・・」

何て言つて良いか分からぬ。

「いいえ?、ありがとう?、あなたは間違つてない?、分からぬ。

そう、香代は間違つてなんか無い。僕が悪いし、僕がしねば良かつ
た。

でも美優がそつまでして僕を護つてくれた、それも香代の言つ通り。
でも矛盾してゐる。分からぬ。どうしたら良いんだろ?。

「僕・・・」や、ごめん・・・

自然と出て来た言葉がそれだつた。

驚いたように香代が顔を上げて、僕を泣きはらした田で見ている。

「僕が・・しねば良かつたんだよね・・。生きてちゃいけないんだ・・。
・僕は」

そんな事、いつもりじゃない。
でもそう言つてしまつた。

『そんなマイナスな事言わないのっ』

不意に美優の言葉が蘇る。 そつなんだ、そつなんだけど・・

だつて、本当の事だから

「でも・・私だつて思えたんだ・・美優が居て彼方君が居て草原さ
んが居て、由衣が、居る・・あんたはそれだけ誰かに慕われてる・・
・私には・・無い、事だから・・。」

香代がそつ呟く。 僕は香代をジツと見つめた。

片手で眼を擦りながら香代も僕を見ていた。

「・・・香代も・・有るよ。 美優がずつと言つてた。 香代の事」

だから羨ましかつたんだ。 香代の事が。

美優に自慢して貰える香代の事が。

羨ましくて、妬ましくて、でも仲良くなりたいと思つた。

そう思つた矢先だ、こんな関係になつてしまつたのは。

「私だつて聞いてた・・・アンタのこと、すつと、美優から

「え・・?」

僕は驚いた。 聞いてた? どういう事?

「美優、あんたに逢わせたいってずっとと言つてた・・・。凄く良い子だつて」

ずっと、思つてた。

誰かに自分の事を自慢して貰える事、
僕には有り得ない事。絶対に無い事。
そう、思つてた。

香代は良いな、香代は狡いな。
そう思つてた。

「なん・・・だあ・・・」

一気に身体中の力が抜ける。呆然と香代を見上げて、僕は俯く。
何だか力が抜けて涙が出てしまつた。

狡いのは僕の方だ。

「・・・なさい・・・」めんなさい・・・

ぽつりぽつりと僕は呟いていた。俯いたまま、香代に謝つた。

香代は黙っている。でもきっと、何で謝るの?、といつ顔をしていたに違いない。

僕は心の中でずっと香代を恨んでいた。

自分は美優に自慢して貰えるクセに僕を苛めるんだ、って。

僕には無いモノを沢山持つてゐるクセに、って。

そう思つてたんだ。

そう思つてれば、自分ではなく他の誰かを恨んでられるから。自分を恨む事は少なくなるから。

狡い、って。自分の事を狡い、って思わずには済むまい。

莫迦みたい、ほんつと、莫迦じやん。。。

「・・・貰つてたんだ・・・・」

そう呟くと、余計に涙が出て来てしまつて何だか止まらなくなつた。

香代は心配そうに僕の顔を覗き込んで、大丈夫?と呟く。

僕は小さく頷きながらもずっと、泣いていた。

想像以上に沢山の人と、僕は生きていたようだ。

何時もあんたの事思つてゐる人ばかりで羨ましかつたんだ、と香代は言つた。

そして、『めんなさい、とまた謝つた。

小さい頃、僕の前で両親が妹しか自慢しないのは普通の事だと思つ

てた。

僕は「違つ」から。 僕は「要らない」から。

当たり前だつて思つてたんだ。

何時しかそれを恨むようになつた。

そんな自分の感情は有つてはいけないつて思つた。

ひつしで打ち消そとすると、有つてはいけないと思つ感情が消えていった。

誰かを恨めば恨むほど、僕を恨む感情が少なくなる。
気付いたら誰も信じられなくなつて誰もかれも恨むようになつてしまつた。

本当に嫌な奴、だ。

だけど僕は貰つていた。

ちゃんと、日芽からも美優からも彼方からも。

僕が欲しかつたモノ、ちゃんと・・・貰つてたのに。

知らなかつた。 知らないフリ・・・してたのかな。

ちゃんと一緒に居て、一緒に笑つて、言葉を交わして・・・
ちゃんとやつてたのに・・・。 当たり前の事だつて思つてた。

一緒に居るのも笑うのも言葉を交わすのも、当たり前の事だ、つて。

そんな事無いのに・・・初めてだつたのに・・・
楽しい、つて思う気持ちも・・・全部・・・

美優に教えて貰つて

田井や彼方とやつた

楽しい時に笑うといつ事も 他愛の無い話をする事も

許されない事だと思つてたのに

気付いたら、当たり前にやつてる自分が其処にいて

駄目だ、つて思つてもやつたくて

そんなのは何処かに消えていて、家に帰つた瞬間それも蘇つて
やつてきた事を忘れてたのかもしれない。

良く分かんないけど・・ともかく僕は ちゃんと貰つてたんだ・・。

・・結局僕は護られてたんだ。

「・・・ひめんなわー」

伝えたかつた言葉はもつと違うものだった。

でもこの時はとてもじゃないけど言葉には出来なくて
こんな風にぐちゃぐちゃになつて言つのも何か勿体ないと思つたか
ら。

もつとひめんと、強くなつて 微笑みながら言えるようになるまで・

僕は取つて置こうと思つた。

「・・・もう一回私と、友達の友達からやり直して・・くれる?」

香代が恐る恐るそう聞いてくる。
僕が何とか泣き止んだ時だつた。

答えはもう、出でいた。

「・・当たり前・・だよ?」

何が僕らを狂わせたのか
何が悪いのか 僕が悪いのか

今はまだ・・良く、分かんないや で終わらせるけど
何時か答えが分かつたら・・

怖くていけなかつた美優の墓前に手をあわせに行くから
今はまだ、答えは出でないけど・・ね。

まな板と包丁が触れ合つ音が嫌いだつた。

子どもが母親を呼ぶ声が嫌いだつた。

トントン、とまな板と包丁が触れ合つ音が台所に響く。

手元には豆腐。これは今朝の朝ご飯の味噌汁に入れる予定の豆腐だ。

「おかーセーんっ！」

其処へ自分を呼ぶ少女の声。

振り返ると、赤い飾りの付いた髪ゴムを持つて幼稚園の制服を着ている

自分の子どもが立っていた。

「どーしたの？ 美優。」

豆腐を切りながら顔だけ美優、 といつ自分が自分の子どもに向ける。美優は髪ゴムを差し出すと

「髪むすべないのー」

・・と困ったように言った。 所が自分は今豆腐を切つていて手が離せない。

「それは彼方にやつてもらつて、僕今手が離せないから。」

「わかつたあー」

美優はそつこうと、パパー、と叫びながらリビングへと消えていった。

何が僕らを元に戻したのか

こんな風に僕が一番嫌いだつたものを今僕が作つているのか

まだ、良く解つていない。

だけど美優の墓前には毎年、お盆と命日に手を合わせに行く。

彼方と美優と それから口芽や香代・・・ それと、僕で。

誰よりも君に 守りされていた僕で・・・

・・・・・・・・・・・・・・end

(後書き)

苛めにあつてゐる月歌、
月歌の友達の日芽、
月歌を苛めている香代、
日芽の友達で月歌を苛めている由衣、
月歌を好きな彼方、
香代と月歌の親友の美優、
みんなそれぞれの想いがあつてそれぞれの言い分が有ります。私は
そういう話が書きたくて何ヶ月も掛けてこの話を書かせて頂きました。
此処まで読んで下さつた方、有り難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4989d/>

誰よりも君に・・・

2010年12月31日15時13分発行